

知的障がい者学級活動を支援するスタッフ(主にボランティア)のあり方について
～A地区学級主事としての立場からの中間報告～

○廣田治久 上野 幸 山崎律子(余暇問題研究所)

キーワード：ボランティア、知的障がい者学級、学級主事

1. はじめに

本実践研究報告者は、標記学級活動の学級主事として 2009 年からその役割を継続してきた。この学級については、先に「知的障がい者の余暇活動についての事例報告」(レジャー・レクリエーション研究 55 号、2005)の中で報告されたが、現在の学級の概要は下記に示すとおりである。

活動回数：年 16 回	期間：5 月～翌年 2 月	開催日：土曜または日曜
対象者：区内の知的障がい者	年齢：18 歳～35 歳	登録者数：61 名、男(48)・女(13)
主な活動	趣味講座(音楽、料理、フラワーアレンジメント、軽スポーツ)、外部講師による指導 行事(運動会、新年会など)、宿泊研修(1泊2日)、外出プログラム、他	

この学級の運営体制は、事務局、学級主事、各趣味講座講師、スタッフ(主にボランティア)により成立する。その中で、学級主事の役割は、学級生の相談役、スタッフのまとめ役、各講師との調整であり、スタッフの役割は学級生と共に活動、およびサポートを行うことである。

以上のような状況において、今回はスタッフであるボランティアに着目した。なぜならば、この学級活動における成否の重要な鍵であるボランティア達の状況を、より深く理解することによって、全体の学級運営円滑化を促進させる原動力と成り得るからである。

したがって、今回の本実践研究報告の目的は、ボランティア達の一般的状況を把握するとともに、主に彼らが感じている不安や問題を探り、学級主事として、その役割の一端に資することである。

2. 研究方法

- ・調査方法・・・日常会話的な聞き取り調査(30分程度)、およびアンケート
少人数のため直接の聞き取りを主とし、直接聞き取りできない場合は、アンケートを実施。
- ・期間・・・2015年9月26日～27日
- ・対象者・・・登録ボランティア16名(男性8名：女性8名)
- ・分析・・・得られた回答の整理、およびその特徴の抽出。

3. 結果および考察

1) 学級生の理解とコミュニケーションについて

- 「学級生とのつながりを感じる」、「一緒にいる事が楽しい」、「癒される」などや、「自分の話を聞いてくれない」、「言葉で表現してくれない」、「教育や研修の機会の必要性」などの回答を得た。
- ボランティアは学級参加によって満足や充実感を得ている。しかし、コミュニケーションに関する事柄に難しさを感じている状況が伺える。とくに宿泊研修などは、食事

や入浴など終日の行動を学級生と共にする内容であり、その難しさをより強く感じる活動であると推察される。よって、ボランティア自身も学級生の理解を深めるための教育や研修の必要性を感じている。

2) ボランティア同士の協力、関係性の向上について

○「交流や話をする機会がとてもよい」、「経験者同士はツーカー」、「経験者からのアドバイスが励みになった」などや、「ボランティアに差がある、感じる」、「お互いに許容することも必要」などが得られた。

○ボランティア同士の関係に好感も持っているが、一方で学級生への理解や対応に差を感じている。しかし、互いに認め合うことの必要性も感じている状況が垣間見られた。現在のボランティア同士はより良い協力状態や関係性にあると把握しているが、今後さらにそれらの向上を目指す働きかけを工夫・継続していくことが求められている。

3) ボランティアの減少、高齢化について

○「人数が少ない」、「若返りが必要」、「体力的な不安」の回答が得られた。

○ボランティアは、50・60代が10名と登録の半数以上を占めている。また、登録できるボランティアは定員20名だが、現在定員を満たしていない。ボランティアの減少、高齢化は学級活動への支援全体にも影響を及ぼす急務な課題である。

4) 企画・進行への負担について

○「特定のボランティアに役割や責任が偏る、または負担に感じる」、「人前に入る進行役が苦手」、「もっといろいろな活動がやりたい」、「自分の意見が通らない」、「これまで多様な活動を企画してきた」、「障害の度合いが変化(自閉が多い)してきている」などの回答を得た。

○学級活動内容の企画は、学級日とは別に開かれる企画会議において行われているが、この企画会議に参加するボランティアも限られてきている。このような状況からも、特定のボランティアに企画・進行が集中し、偏る現状を彼らも強く課題に感じている。ボランティアの負担を軽減するために、事務局と連携して活動の年間計画の変更や、企画の内容を昨年度の踏襲から始めるなどの対応を行ってきた。しかし、この対応の影響からか、企画などを制限する印象を与えている可能性が考えられる。ボランティアに企画を任せることで、彼らの主体性や積極性、充実感や達成感を得ることにつながっていると推察されるが、学級生の変化(多様化)に対しての難しさも感じている。今後、これらの課題と、さらに先に述べた“学級生の理解”、“ボランティアの減少、高齢化”とを総合的に捉えて対応を検討する必要がある。

4. まとめ

ボランティアが感じている不安や問題意識がこの段階ではある程度明らかとなった。主事の立場でこれまで感じてきたことと、その多くが同様の内容であったことも確認できた。今後主事として、スタッフ(主にボランティア)の積極性の向上や負担軽減に配慮しつつ、学級主旨の理解、スタッフの役割などを総合的に、深く考えた方策を検討していく必要を痛感した。このようなことから、スタッフのあるべき姿、学級主事としての実際運営への極めて重要な示唆が得られた。

最後に、知的障害者学級に献身的に参加いただいているスタッフには、感謝の言葉しかなく、今後も彼らとの協力の中でより良い学級活動を目指していきたい。